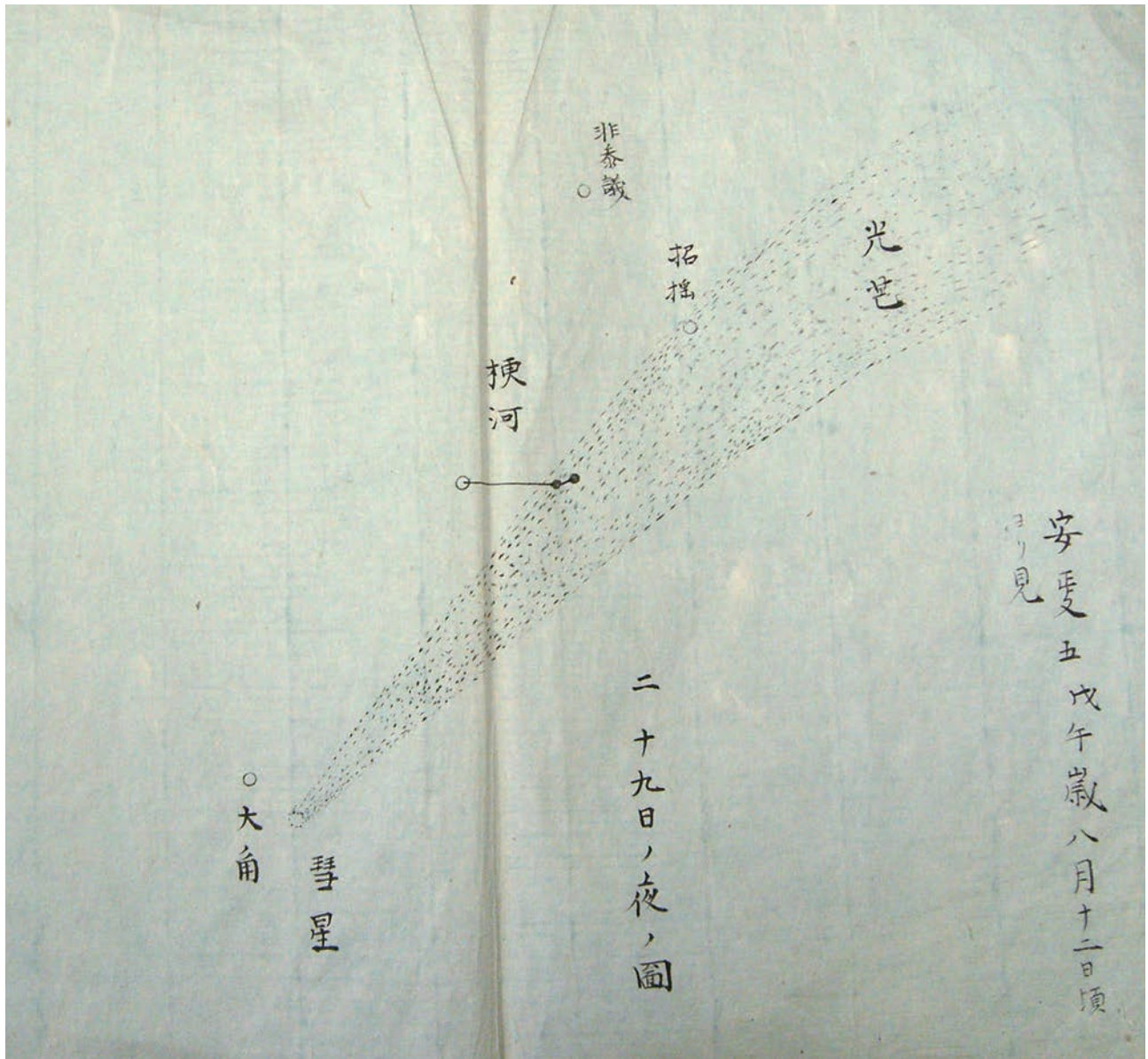


岩崎博秋が記録したドナチ彗星

伊那市立歴史博物館蔵



岩崎博秋は、高遠藩の代官を務めた人で、天文学にも関心を示し多くの天体観測記録を残しています。この図はドナチ彗星で、岩崎博秋が安政5年8月29日の夜に記録したものです。ドナチ彗星は、安政5年8月上旬から9月中旬（1858年9月中旬から10月下旬）まで見えていたようです。図中には、彗星の他にうしかい座の星たちが描かれていて、「大角」はうしかい座のアルファ星（アルクトゥルス）、「梗河」はエプシロン星・シグマ星他、「招搖」はガンマ星です。この図から、彗星の形状がわかり、大きさ（尾の長さ）を見積もることができます。

安政5年に現われた大彗星 ～ドナチ彗星の記録～

● 彗星が記録されていた日記類 ●

幕末期の嘉永6年(1853)から文久2年(1862)にかけて5つの彗星が現われていることが、当時の日記や観測記録を調べることでわかってきました。10年間に肉眼で見える彗星が5つも現われていることは、ある意味特殊な時期であったといえます。それらの彗星は次のとおりです。

嘉永6年から文久2年に現われた彗星

年号	月	西暦年	西暦月	彗星名	日記等
嘉永6	7月	1853	8月	クリンカーヒューズ彗星	・葦沢家日記 ・高野日記 ・岩崎家日記
嘉永7	3月	1854	4月	不明	・岩崎家日記
安政5	8月～9月	1858	9月～10月	ドナチ彗星	・葦沢家日記 ・高野日記 ・荒川九郎日記 ・岩崎家日記
文久元	5月～6月	1861	7月	テバット彗星	・荒川九郎日記 ・高野日記 ・岩崎家日記
文久2	8月	1862	8月	スイフト・タットル彗星	・高野日記 ・岩崎家日記

葦沢家日記は、麻績村の名主源右衛門が書き始めた日記で嘉永5年から現存し、東筑摩郡麻績村が所蔵しています。荒川九郎日記は、更級郡東福寺村(現在の長野市篠ノ井)の荒川九郎が記録したもので、安政3年から記録があります。高野日記は高野という松代藩士が記録したもので、嘉永5年からの記録です。いずれも長野県立歴史館が所蔵しています。また、岩崎家日記は、高遠藩代官を務めた岩崎博秋が記した嘉永2年からの日記で、伊那市立高遠町図書館が所蔵しています。

● ドナチ彗星 ●

これら5つの彗星の中で、特筆すべきは安政5年の彗星で、ドナチ彗星と名づけられています。ドナチ彗星は、イタリアの天文学者ドナチによって1858年6月2日(安政5年4月21日)に発見されました。この彗星に関しては、上記4つの日記すべてに記録があり、その日数も記載量も多いのが特徴で、さらに岩崎博秋は詳細な観測スケッチを残しています。(表紙の図)このことから、ドナチ彗星は長期間に渡って明るく見えていて注目を集めていたことがうかがわれます。

そこで、ドナチ彗星がいつ、どのように見えていたのか、日記類を頼りに日を追ってその様子を推測し、視覚的に表現してみます。

ドナチ彗星の記録をそれぞれの日記から拾い出し、日別にまとめたのが次ページの表です。記録は、安政5年8月3日から9月19日までの間に、15日間、17件ありましたが、そのうち彗星の様子参考になることが書かれているのは9日間でした。彗星が見え始めたのは8月12日ごろからで、その頃は彗星が北寄りに位置していたため、日出前と日没後の両方に見られましたが、次第に明け方の空では見えなくなっていました。

(1) 彗星の見かけの大きさ(尾の長さ)

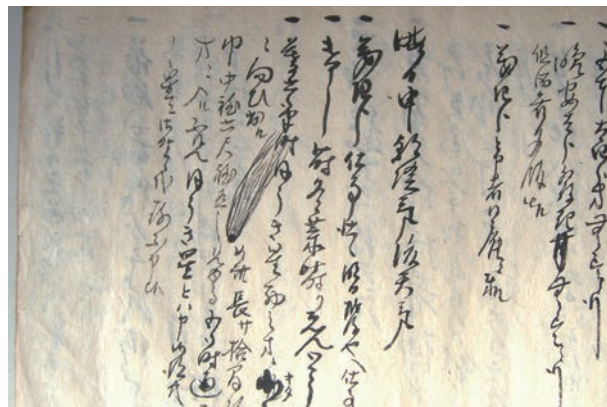
いずれの日記にも尾の長さの表記があり、そのほとんどが「尺」「間」「丈」という単位を使っています。現在は角度をもって見かけの長さを表しますが、両者の関係は高野日記と岩崎博秋のスケッチから割り出すことができ、1尺=0.3°～0.4°となりました。ちなみに、1間=6尺、1丈=10尺です。

(2) 彗星の形

それぞれの日記に簡単な彗星の形が描かれているため、およその姿はわかりますが、岩崎博秋の観測記録には詳細なスケッチがあり、彗星の形、大きさ、位置が正確にわかります。

以上をもとに、ドナチ彗星がどのように見えていたか、8月12日から9月18日までのおよその様子を推測して描いたものが次ページの図です。日記の情報量の不足から、それほど正確とはいえませんが、ドナチ彗星の壮大さが少しでも伝わればと思います。なお、日々の彗星の位置に関しては、(株)アストロアーツのステラナビゲーター(天文シミュレーションソフト)を参考にしました。

(大蔵 満)



葦沢家日記のドナチ彗星の記録(安政5年8月30日)
東筑摩郡麻績村所蔵

日記に記録されたドナチ彗星

安政5年 (旧暦月日)	1858年 (西暦月日)	日記名	日記の内容	備考
8月3日	9月9日	荒川九郎日記	三日 ほふき星の事あり。	
8月4日	9月10日	荒川九郎日記	四日天気。ほふき星、この頃より出るなり。	
8月12日	9月18日	葦沢家日記	今晚七ツ半時ころ、丑寅の間にほうき星出る。かくの如く北の方へ向い出る。	暁七ツ半=4時06分 丑寅=北東
		荒川九郎日記	この頃、夕六ツ時頃より戌亥の方にほふき星出る。(ツノ星共云候) けん先北の方へ 又朝六ツ時ころ前には寅の方にほふき星出て、これもけん先北の方、三尺より五六尺。かくの如く北の方へ有。後に地口有。	明六ツ=4時59分 暮六ツ=18時23分 戌亥=北西 寅=東北東~北東 三尺=1° 五六尺=2~3°
8月13日	9月19日	高野日記	近日、彗星暁は七ツ半時まで東方に見 宵には西北に見。五ツ時頃は山に入り、長一丈二三尺ばかりは立会示観。	明方=東 宵=北西 暁七ツ半=4時07分 五ツ時=20時08分 長さ一丈二~三尺=3~4°
8月15日	9月21日	荒川九郎日記	ほふき星出。諸人申候は、世界に不思議有といふ事知らせんが為に、天に不思議あらわれ候といふ。実に気のわるきよふな事に御座候。異国船の事、國中騒しき事、それ故ほふき星出しと人が云。地口に、「蔵さしとてそうじにきたかほふき星花の御代にはちりぞあるまへ」	
8月16日	9月22日	岩崎家日記	この頃、西北山の端へ懸り、六ツ時ころより同半前まで彗星顕れ申候。	
8月22日	9月28日	高野日記	去る十四日より、連夜天陰或雨。彗星出没無由知。然に、今夜晴天西北に見る。戌時に至、山に入。長凡二丈ばかり。	方向=北西 長さ二丈=6~8°
		岩崎家日記	去る十四五日頃より西の方箒星相見へ候よし。今夕初めて見候ところ、左のとおり。月代(さかやき)の如し。大角位の光ボンヤリ。西の方、大微垣の当り、北斗揺光斜に見ゆる。最雲の間より見ゆる。	大角=うしかい座のアルクトゥルス(明るさ0等) 大微垣=北斗七星の南の領域
8月23日	9月29日	岩崎家日記	夜分彗星見え候事。別に図面候事。	
8月29日	10月5日	荒川九郎日記	ほふき星の事、大坂にても同断の事。夕五ツ時ころ見へ候。西の方、少北江よりほふき星出る。今廿九の夜、けん先少北に、長き事五間より先なり。光明星とも申候。長き事十間二十間先。八月十一日ころ見候処申、見へる見へぬとそのまま。	方向=西やや北 長さ10~20間=20~40°
8月30日	10月6日	葦沢家日記	暮六ツ半時、ほうき星西の方に、北之方に向ひ出る。 かくの如く長さ十間ほど、巾中程六尺ほどこれ有るを見ゆる。五ツ時過、西の方に入る。不見。ほうき星とは申候えども、如何の星御座候や、存じ申さず候。	暮六ツ半=18時53分 方向=西 長さ十間=18~24° 幅=2~3° 五ツ時=19時49分
9月1日	10月7日	高野日記	初彗星西北に見(去月11日味爽と黄昏に見る者あり。云江都上田口より見、朝は光芒五尺ばかり、ター尺ばかり)黄昏より戌に至り没す。 然に毎夜南に寄り六七尺。今夜に至ほとんど西に見ゆ。光芒全稍長大、およそ五丈ばかり(量測するに、二十度あるいは十五度不同。幅三度。四百九十二里ヨ 八十四里ヨ) 南側は濃く、北側は薄くしてこれ不明。その色遠火の欲滅煙の如く白莫にて少し□青黒を帯び、本濃く、未薄く、薄々至りては衆星を近見え、且其煙直立せず。北に斜のこの説紛々に不定。愚考には、星の南に走り連なるを以て、煙東北になびけると思はる。晨に見たるは、去月末日没不見と云。同星か別星は其説不定。	毎夜、南へ移動 9月1日の方向=真西 長さ五丈=15~20° 幅=3°
9月9日	10月15日	高野日記	この夜、彗星光芒減縮かつ薄し。これは、月光に推されたるか。(正)西よりは南に移れり。	真西より南寄り
9月10日	10月16日	高野日記	赤道を過、西南に宿す。「彗星不見」去月十一日至て、昨夜およそ二十九日で消。	南西
9月18日	10月24日	高野日記	彗星、昨夜なお西南に見。夜に南に移、赤道を過たる後、月夜故に光芒短縮なり。初東を指し、赤道を過て後、東南を指せり。 今夜西南隅雲あり、不見。但、これまでの例に由て、南移せば、今夜は峯入り不可見と云。	9月17日、南西 9月18日、南西に雲あって見えず
9月19日	10月25日	岩崎家日記	今彗星見終り	



ドナチ彗星は、8月末が最も尾が長くなり、その時の長さは20~40°に及んだようだ。※9月9日以降は特に情報量の不足から不確さが大きい。

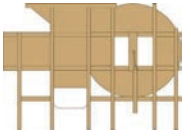
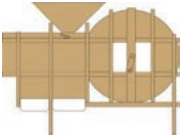
県内の唐箕の特徴

【はじめに】

多くの博物館に保管されており、来館者の体験用としても用いられることの多い民具資料に、唐箕があります。唐箕は収穫して脱穀した稲粃を粃とわら屑に分けたり、精米して玄米と粃殻が混ざったものから、粃殻を取り除くときなどに用いられる農具です。唐箕という名前の通り、もともとは中国で発明された農具で、日本に伝来したのは江戸時代前半頃と考えられています。

【東日本型と西日本型】

江戸時代の後半頃には全国に広がったとされる唐箕ですが、それを裏付けるように、江戸時代の年号が記された唐箕が今も各地の博物館などに残されています。一見どれも同じように見える唐箕ですが、その形態は、関東を中心とする東日本に共通してみられるタイプ（型）と、京都を中心とする西日本に共通してみられるタイプ（型）に大きく分けられるとされます。

	東日本型	西日本型
図		
①土台	縦の柱	一番下の横木とそこから延びて羽根を動かす太鼓部の中心を通る主柱
②羽根を回す軸木の支持具	短い縦木	主柱あるいは短い横木
③脚	多脚	4脚
④落下調節装置	板を差し込んで調節する方式で、時代が新しくなると板を回転することで調節する方式に変化する	正面に操作具が設けられた回転板形式
⑤樋口	1番口と2番口が左右振り分け	1番口と2番口が並列

(内藤 2009・小坂 2002・近藤 1991 をもとに作成)

唐箕が大きく東日本と西日本で分けられるとすると、その真ん中に位置する長野県の唐箕がどちらのタイプに属するかは、興味のあるところです。そこで当館所蔵の唐箕とその周辺地域の唐箕の特徴を見ていき、従来の唐箕の型との関係について考えてみたいと思います。

【館蔵の唐箕】

当館が所蔵する唐箕は 24 点で、そのうち年

号が記されたものが 6 点、年号以外の墨書が記されたものが 8 点、残り 10 点は墨書がない無銘のものです。これらの唐箕のうち製作年が確定できる 6 点についてその特徴を比べると、いずれの唐箕も、東日本型の特徴のうち①から④までが合致します。

館蔵の唐箕の中で最も古いのが天保 12 年 (1841) の唐箕で、年号とともに「細工所 石堂村 古屋軍蔵」と製作者名が記されています。館には古屋軍蔵の名前が記された唐箕が他に 2 台あり、それぞれ弘化 3 年 (1846)、安政 7 年 (1860) の年号が記されています。そのため、同じ職人の唐箕を時系列に見ることができます。

すると、天保 12 年のものが樋口が左右振り分けであるのに対し、残りの二つは 2 番口が唐箕の真下に口を開き、粃などを落下させるつくりになっていることがわかります (写真 1)。おそらくは、2 番口をわざわざ唐箕の裏側に設けるよりも、真下に落とすようにしたほうが、作りが簡単であること。また使い手にとっても 2 番口から出る穀物を裏に回って取らなくても良いように使い勝手を良くすることを目的としてこの形へと改良したと考えられます。しかし、2 番口が唐箕の真下に口を開く形式は、古屋軍蔵作以外でも嘉永 2 年 (1849)、大正 5 年 (1916)、大正 7 年 (1918) 銘の唐箕において見られ、年号が記された唐箕のうち天保 12 年のものを除き全てがこの形式となっています。このことから 2 番口が落下式の樋口は、ひとり古屋軍蔵による工夫ではなく、長野市域の唐箕の特徴となっているといえます。



写真 1 安政 7 年銘の唐箕

【信州新町の唐箕】



写真2 信州新町日原文化財収蔵庫の唐箕

館蔵の唐箕は東日本の特徴を備えています。信州新町日原文化財収蔵庫には写真2のようなこれまでの唐箕とは異なる特徴の唐箕が所蔵されています。「上水内郡津和村唐箕大工 大正拾参年拾月 西澤多源治」の銘があるこの唐箕は、1番2番口の樋口が並列につけられ、脚が4本脚という、西日本の唐箕に見られる特徴を有しています。東日本の特徴を備えた唐箕が多い中で、この唐箕は異質に映りますが、少し南に目を向けると同様の唐箕が多く存在していることがわかります。

【松本市立博物館の唐箕】



写真3 松本市立博物館蔵 唐箕

松本市立博物館には古い順に天明2年(1782)・弘化4年(1847)・文久元年(1861)の年号が記された唐箕が所蔵されています。そのいずれもが4本脚・樋口並列で、信州新町のものと同様の特徴が合致します。ただし、漏斗の取り付け方や漏斗の下に設けられた落下量調節装置は異なり、信州新町に比べるとより西日本型に近い特徴を備えています(写真3)。

この館の唐箕の大きな特徴は、天明2年と文久元年の唐箕の翼車軸を回すところの窓が四角ではなく円形を呈しているところです。明治以降の小型化された唐箕の中には丸窓を有するものも見られますが、江戸時代のもので丸窓をもつ唐箕は他に見られず、どのような発想、あるいは技術の系譜から丸窓が作られたかは不明です。

【安曇野市豊科郷土資料館の唐箕】

豊科郷土資料館の唐箕も4本脚・樋口並列です。このうち弘化3年の銘がある唐箕には製作者として「木曾上田村 大工原吉左衛門」とあることから、このような型の唐箕が木曾地域まで広がっていたことが推測されます。

【小結】

これまでの各地の唐箕の特徴から、同じ県内でも長野市域と松本・安曇野地域では唐箕を支える脚と樋口の配列において異なり、長野市域は東日本型に近い特徴を、松本・安曇野地域は西日本型に近い特徴を備えていることがわかりました。ただ、唐箕の構造と軸木の支持具の取り付け方は、両地域とも東日本型の特徴を有していることから、松本・安曇野地域の唐箕は正確には東西折衷の唐箕といえます。これらの唐箕の特徴は、東西の中間に位置する長野県ならではのものと言えるでしょう。

今回は唐箕の形態に絞って、両地域の特徴を見てみました。形態の差異の背景にある、職人の技術の系譜や、機能面からの考察については、また改めて考えていきたいと思います。

参考文献

- 近藤雅樹 1991 「紀年銘唐箕の形態分類」『国立民族学博物館研究報告』16巻4号 国立民族学博物館
- 小坂浩志 2002 「唐箕の地域的特色・江戸時代の紀年銘唐箕を中心にして」『川崎市民ミュージアム紀要』第15集 川崎市民ミュージアム
- 内藤大海 2009 「唐箕研究の動向と問題点」『歴史民俗資料学研究』第14号 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

(細井雄次郎)

はじめに

自然界には他の生物の体に忍びこんで栄養を横取りして生きる生物や、体の表面にとりついて生きる生物がいます。このような生物を寄生虫と呼んでいます。何万種類以上が存在しているといわれ、その形態や生活史は極めて多種で不思議です。人間の身体に潜り込んで生活する寄生虫だけでも 200 種以上存在するといわれていますが、そんな中でも極めて特徴的で人間の身体に重篤な害をもたらす寄生虫が住血吸虫です。

本稿では、日本住血吸虫（以下、日住虫と記す）がもたらす病気である日本住血吸虫病（以下、日住病と記す）撲滅にいたる歴史と、撲滅において重要な発見をした郷土長野市出身の衛生学者の存在、現在の状況について紹介します。

日住病と日住虫の発見

日本の数カ所の地域で古来の業病・難病・奇病として恐れられていた病気がありました。最初は発熱・下痢・全身の倦怠感にはじまり、次第に腹が膨れてやがては死に至るとというのが典型的な症状ですが、軽い場合でも成長が止まるとか「てんかん」のような症状になる場合があります（写真 1）。



写真 1

「俺は地方病博士だ」挿絵
山梨県立博物館蔵

主な流行地は、山梨県甲府盆地の釜無川流域、広島県福山市の片山地方といわれた地域、九州の佐賀県、福岡県にまたがる筑後川流域などでした。いずれの地域においても明治以前はその原因も治療法もわからない恐ろしい病気とされていました。

明治維新以後、この病気の苦しさには堪えかねた患者の訴えや、一家全員はおろか村全体がこの病気にかかる例などを問題視した行政機関の訴えなどもあり、西洋の先進的な医学を学んだ多くの学者が原因究明に取り組みました。明治 37 年（1904）、岡山医学専門学校の桂田富士郎教授は山梨県のこの病気の流行地から入手したネコから雄虫を見つけて日本住血吸虫と命名しました。しばらく遅れて京都帝国大学の藤浪鑑教授は広島県片山で死亡した患者の解剖をして雌虫を発見しました。激しい研究競争の結果、原因不明だった難病の原因である寄生虫が発見されました（写真 2）。



写真 2

中間宿主の発見

古来の難病の原因が、体長 20mm 前後の寄生虫であったことがわかりましたが、それがどのような経路で人間の体に潜りこみ、どのような生態であるのかがわからないと病気の予防対策が立てられません。そこで感染経路を解明するための研究が続けられ、論文が続々と発表されました。当初は口からの感染ではないかとの説もありましたが、次第に経皮感染（皮膚からの感染）説が有力となってきました。

長野市松代町西寺尾（当時の更級郡西寺尾

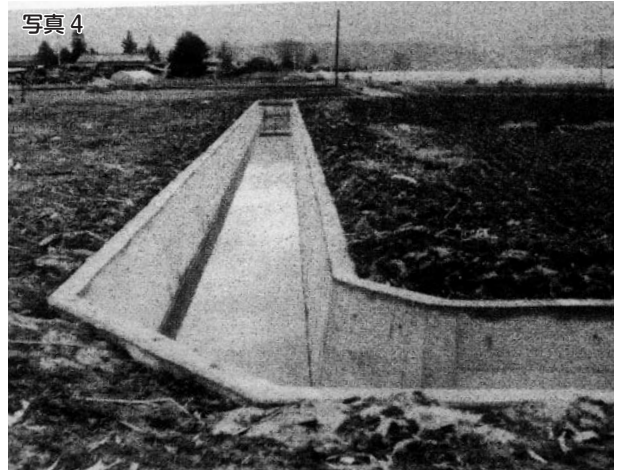
村)で生まれた宮入慶之助(慶応元年生まれ)は、京都帝国大学福岡大学(後の九州帝国大学医学部)教授として福岡に赴任した際、筑後川流域に不思議な病気があることを知り研究を開始しました。地元の農民から、入ると必ずこの病気になるということで有名な農水路を教えられ、大正2年(1913)7月にその水路にネコとウサギを入れて観察していると、水路の中を這っている7~9mmの小さな黒い巻貝(写真3)を見付けました。この貝に



ついて感染実験などを繰り返して調べた結果、日住虫に感染している動物の便にある虫卵より出た幼虫が貝に侵入し、発育して、そこから出たセルカリヤと呼ぶ幼虫が哺乳動物の皮膚から感染するということが確認されました。そして、この貝が日住虫の中間宿主であると発表しました。この発見は当時の世界の医学研究をリードする業績でした。

撲滅対策

日住虫の中間宿主が発見されたことで、発見者にちなんで宮入貝と呼ばれることになったこの貝を駆除すれば日住病を予防できることがわかり、各地で撲滅対策が開始されました。しかし、宮入貝の駆除は生易しいものではなく、宮入貝を撲滅するために各種の対策が進められました。戦前は石灰の散布や、石灰窒素、Na-PCP、ユリミン、B-2などの化学物質の散布が行われましたが、公害の問題のために普及しませんでした。昭和20年代後半に田畑



の溝をコンクリートで固めると水陸両棲の宮入貝の生息が減ることが示され、溝梁のコンクリート化が法制化されました。政府の援助が入り、この方法が大規模に実施されました(写真4)。また、九州の筑後川流域では河川敷をゴルフ場にするなど大規模な河川改修が行われ宮入貝の生息を抑える環境づくりが進められました。他にも、水田の果樹園への転換、宮入貝の天敵であるホタルの幼虫の導入などが試みられました。関係行政機関は感染防止のため、宮入貝と日住虫との関係を示すポスターや啓蒙書を作成して流行地の住民に配布しました。患者の発生を調べるために検便検査が広く実施されました。その後、感染者の検出のためのCOPT反応検査が開発され、より精度のよい検査が行われるようになりました。

大学からは専門研究者が各地に派遣され調査研究に加わりました。例えば、山梨県では山梨県衛生研究所に千葉大学、国立予防衛生研究所などの研究者が加わり、調査研究がすすめられました。その他に広島、筑後川流域でも研究者が加わって調査研究が進められました。

こうした官学民が一体となった努力が積み重なって宮入貝の生息も見られなくなり、死者も患者の発生も0が続くようになりました。平成2年(1990)から平成8年(1996)にかけて各地で安全宣言が出され、平成12年(2000)に筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会が宮入貝の根絶を宣言しました。宮入貝の発見から87年後のことでした。

100 年後の現在

(1) 日本

日本各地で安全宣言が出されて宮入貝撲滅のための組織は解散され、行政機関でもその業務は縮小に向かいました。宮入貝は駆除されたといわれます。しかし、その後も残る患者の治療が続けられました。また、甲府盆地の一部などでは日住虫は感染してはいないものの依然生息が確認されています。広大な生息地では完全に駆除することは困難とみられ、一部の専門家からは、継続的かつ組織的な監視活動が必要ではないかとの声があります。社会活動の国際化や気候変化のため、今後海外から住血吸虫が入ってこないか、日本国内の今まで流行がなかった場所で宮入貝が大発生するようなことはないのか、そのような場合に検査・診断・治療のできる体制をどうするかなどの課題が残されていると思います。

(2) 世界

世界では今でも2億人の住血吸虫症患者がいると言われています。世界保健機関（WHO）の資料によると、世界で防圧が困難な疾病のうち感染者が2番目に多いのが住血吸虫症で2億人とのことです。日本住血吸虫症は中国、台湾、フィリピン、インドネシアなどに分布しており、マンソン住血吸虫はアフリカ、南米などに、ビルハルツ住血吸虫はアフリカ、中東、インドなどに、メコン住血吸虫はラオス、カンボジアに分布しています。

日本の学者・研究者が海外の流行地で活躍していますが、地理的な広さや社会的環境の多様さのために日本の成功例をそのまま活用できず、苦しい闘いを続けています。現在も、より良い予防法や新たな住血吸虫対策のためのワクチンの開発など地道な研究が続けられています。

おわりに

日住病の歴史をたどってみると、一衛生学者の発見から予防の道が開けて国内すべてが安全・安心な状態になるためには、実に多くの先人達の努力が積み重ねられていることがわかります。単に発見者の功績のみを語るのではなく現在までの歴史をたどることが大切であると感じるものです。

参考文献

- 石井明 2004『ミクロスコピア 21 巻 1 号日本住血吸虫病の病因発見から 100 年』考古堂書店
小林照幸 1998『死の貝』文芸春秋
多田・大友・金子・山口 1995『エッセンシャル 寄生虫病学』医歯薬出版
松田・桐木 2004『医学のあゆみ Vol.208 No. 2 住血吸虫症の歴史と現状』
宮入慶之助記念誌編纂委員会 2005『住血吸虫症と宮入慶之助』九州大学出版会
山梨地方病撲滅協会 1977『地方病とのたたかい』
塘普 1986『筑後川流域における日本住血吸虫病撲滅史』水資源公団
吉田・有蘭 2011『図説 人体寄生虫学』南山堂
(宮入源太郎)

博物館のHPアドレス

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/>

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500



▲長野市立博物館
携帯サイト